

防衛大学校本科第15期学生及び理工学研究科第8期学生
卒業式における学校長式辞（昭和46年3月21日）

本日、防衛大学校本科第15期学生及び研究科第8期学生の卒業式を行うに当たりまして、佐藤内閣総理大臣^{注(1)}、中曽根防衛庁長官^{注(2)}をはじめ、内外から多数の来賓並びに父兄各位の御臨席をえましたことは、卒業生はもとより、防衛大学校にとりまして非常な荣誉と存じます。ここに教職員と学生を代表いたしまして、皆様方の御厚意に対し、心から御礼申し上げる次第であります。

今日、卒業の栄をにないますのは、本科462名、研究科69名であります。本科の卒業生は、4月から陸・海・空各自衛隊の幹部候補生学校に進み、幹部自衛官となるための教育を受け、来春にはそれぞれ陸・海・空各自衛隊の3尉に任官することになります。研究科の卒業生は、部隊や機関に帰り、研究科在学中に学んだ知識と技能とを生かして、それぞれ責任ある任務につかれるわけであります。私はここに諸君の洋々たる前途を祝福するため、はなむけの言葉をのべたいと思います。

まず第一に私は、諸君が日本国におけるただ一つの防衛大学校で学ばれたことの意義をあらためて強調したいのであります。わが国にはあまたの大学が存在し、近年ますます多くの青年が大学教育を受けています。本科の卒業生諸君が防衛大学校に入学された1967年頃から、これらの大学における紛争が激化し、研究科の卒業生諸君が本校に来られた1969年前後には、研究と教育という大学の機能がほとんど完全に麻痺した場合さえ少なくありませんでした。これはきわめて遺憾な事態であり、長い眼で見た場合、わが国の歴史に必ずや大きな爪あとを残すものと思われます。

しかしそうした大学紛争にもかかわらず、日本国が政治的に安定し、経済的に繁栄してきたことも事実であります。いいかえれば、一般大学の場合、たとえ紛争が起っても、それによって国家の存立基盤が直ちに掘りくずされるわけではないのであります。

これに反して、わが防衛大学校は、将来自衛隊の幹部たるべきものを教育し、訓練す



第3代学校長 猪木 正道

注(1) 佐藤榮作

注(2) 中曽根康弘

るといふ明確な目的を持っていますから、防衛大学校がその任務を果しているか否かは、日本国の安否に直接影響します。なぜならば文化国家、あるいは福祉国家という言葉が示していますように、現代の国家は、人間生活のあらゆる分野にその機能を及ぼしていますが、国家を国家たらしめる必要不可欠の条件を求めてまいりますと、防衛に帰着します。つまり外からの侵略に対しても、内からの破壊活動に対しても国民生活を守るといふことこそ、国家の要件であります。そして諸君が学んだ防衛大学校は、将来幹部自衛官たるべきものを大学設置基準に準拠して教育する日本国のただ一つの学校であります。本校に学んだものの責任の重大さを、この席であらためて自覚していただきたいのは、このためです。

第二に私は、諸君が自衛隊のすぐれた幹部になるため、防衛の専門家という道に徹底されることを望みます。自衛隊の幹部は防衛の専門家でなければなりません。個人として気力体力ともに充実しているだけでは、精強な自衛隊の幹部とはいえませぬ。防衛の科学と技術とにおいて、世界第一級の能力を身につけなければ、防衛の専門家としての資格を備えたことにはならないでしょう。知識が爆発的に進歩している時代に、わずかの間でも油断していれば、たちまち防衛の専門家としての能力を失うおそれがあります。

本科卒業生の諸君が防衛大学校で学んだのは、あくまで基礎中の基礎であります。この意味で本科卒業生にとって本日の卒業式は、実はコメンメント、すなわち始業式であることを銘記していただきたいのであります。4月に諸君が入学される幹部候補生学校こそ、防衛の専門家となるための第一歩でありますから、諸君は久留米、江田島あるいは奈良において本校の卒業生としてはずかしくない成績を示すことを期待します。本科、研究科を問わず、卒業生諸君が防衛の専門家としてますます高度の能力を身につけることこそ、諸君が国民から尊敬をうけ、日本国の平和と安全に寄与する所以であります。

第三に防衛の専門家としての道に徹することの裏付けとして、諸君が防衛大学校で受けた教育を基礎に、人間としての教養を今後ますます高めていただきたいと思ひます。現代は知識が爆発的に増加する時代であるばかりでなく、欲求不満が爆発する時代でもあります。経済が成長、発展するに伴い、人間の欲求不満も表面化します。煽動家はこの機に乗じ、社会の欠陥なるものを摘発し、そのよって来るところを一つか二つかの単純な要因に求め、これらの要因を抜本塞源的に除去することにより、一挙に国家改造の実を挙げうるかのごとく宣伝しています。

防衛大学校において人間性の複雑微妙さを学び、世界がいかに広く、かつ深いかを知った諸君は、この種の煽動の欺瞞性を見抜くのは困難を感じないでしょう。近い将来に諸君が自衛隊の幹部に任官されたとき、中正な判断力によって指揮官としての責任を全うすることを期待し、かつ確信して、私の式辞を終わります。